



ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS Part II

Japanese Studies

J.13 ADVANCED JAPANESE TEXTS

Answer **EITHER** SECTION A **OR** SECTION B **OR** SECTION C.

*Write your number **not** your name on the cover sheet of each Answer Book.*

STATIONERY REQUIREMENTS

*20 Page Answer Book x 1
Rough Work Pad*

SPECIAL REQUIREMENTS

The dictionary Shinjigen will be available.

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed that you may do so by the Invigilator.

SECTION A [based on J.15]

1 Translate into English the following passage from an unseen text: [40 marks]

わたしは朝鮮人

壊れていく家庭

私は在日朝鮮人二世である。現在二〇歳だが、今日までの私の歩みを語ろうとする時、自分が、朝鮮人、李良枝を名乗るようになった過程を語るといふかたちでこの手記をすすめていかざるを得ない。なぜなら、私が朝鮮人であることを意識したのは高三の時、すなわちつい二年ほど前のことであり、それ以前の私といえは、現在の自分のありようを夢見だにしなかったからである。

私は山梨県で、二人の兄のあとに長女として生まれた。父は一七歳の時に朝鮮から日本に渡ってきて母と結婚し、裸一貫からようやく並の生活を築きあげつつあったころだった。しかし、私が生まれるほんの少し前までは、唯一の寝ぐらが駅のベンチだったというほど、その生活は貧乏きわまるものだったという。田舎であり、親類縁者もないところでも、この馬の骨ともわからぬ朝鮮人夫婦が、何の差別も迫害も受けずに過ごせるわけがなかった。父の腕の傷はいまでも父自

身、思わず顔をゆがめるほど、私が想像するに余りある何かを鮮明に物語っている。

父母はそれ以来、日本の文化・生活に少しでも迎合し、日本人からの信頼を得ることがこの日本の地で生きていくためには不可欠だと考えて、つとめて日本式の生活になじみ、また子どもたちへも日本人としての教育をほどこしていった。そして私が九歳の時、父母は日本に帰化していくのだが、私はその行為自体を取り上げてうんぬんし、両親を責めることはできない。当時九歳だった私は、不本意にも自動的に帰化してしまっただけだが、だからといって私が朝鮮人であるということにはまったく変わりはないと思っている。父母がこころ日本に抱いて、私の知らぬ重い歴史を背負ってきたことを考えれば、「帰化」という不自然な状態を強要し、私のような在日朝鮮人二世を生み出したのは、ほかならぬこの日本だと考えるからである。

「帰化」などしなくても在日朝鮮人の権利は当然保護されなければならぬはずだ。それは近代の朝日の歴史、そして在日朝鮮人の形成史を見れば、どのような弁解をも許さないことは一目瞭然である。しかし、にもかかわらず「帰化」という事実の中に身をおかざるを得ない私、結局その私が最終的に問われることは、以後私がどのような視点で事実を理解し、社会的に自分自身をどのように位置づけ、さらにそれらを発展させて、いかに実践的・創造的に生きていくのか、ということに帰結するのだと思う。

山梨 やまなし	に余りある be difficult to
帰化する become naturalised	裸一貫から starting from nothing
うんぬんする quibble, criticise	寝ぐら lit. 'nest'; home
弁解 excuse	どこの馬の骨ともわからぬ complete unknown
実践的に practically	

(TURN OVER

2 Write a commentary in English on the following passage from an unseen text:
[30 marks]

李恢成が繰り返して描いた少年期において、最も強いアクセントを打たれているのは父親の記憶である。たとえば『砧をうつ女』で、作家はほとんど唯一の美しく肯定的な記憶として、母親（生母）の像を描いているが、そこに現われる父親の像は大変象徴的である。

僕は女が弱い動物だと父からおしえられた。母にたいする父の乱暴は僕らがそう信じる日日の教室であつたわけだ。もちろん、僕は母の支持者であつた。乱暴者の父をにくみ、やがて僕らの力で父を打倒する空想で僕の頭は昂奮状態になってしまうのだつた。

僕は悲鳴をあげた。父が昼をけたからだ。……翌日、僕らはおどおどして母の様子を見つめていた。父は微用の仕事に出かけて部屋の中は母と僕らだけが残っていた。大きなマスクをつけた母の青ざめた顔の中で切りこみの深い目だけが異様に光っていた。昨日のいさかいの末、妻の唇を乱暴者の夫が裂いたのだ。（略）とつぜん母はいったん詰めた日本の着物を引き出すとズタズタに引き裂いてしまい、押入れの行李から色のあせたチョゴリ、チマを取り出して入れ替えた。どこに行くのだろう。狂つたような母の動作は僕の心を完全に打ちひしんでいた。

あたかも在日二世世代にとっての最初の不幸がそこに訪れたとでもいうように、粗暴な父親の像が、美しい母親像を踏み破るようになつて現われている。いうまでもなく、この粗暴な父親の記憶は、貧乏、

question 2 continued...

乱暴 violence
 昂奮 agitation, rage
 悲鳴 scream
 徴用の forced
 切りこみ open cut
 詰める pack away
 屈辱 humiliation
 想起する recollect
 金鶴泳 Kim Kakuei
 不条理な absurd
 錯綜 complexity, intricacy
 封じる confine, seal up
 溶かす lit. 'melt'; soften
 ギクリとする terrified,
 startled

差別、屈辱感などと同じく、ほとんどの二世にとって根深く共有された心象風景であった。誰もがこ
 ういう痛む記憶を持ち、過去の底の方に静かに沈めているはずである。ただひとびとは、それを様々
 な仕方でも想起するのであって、その想起の仕方がまた二世世代の様々な現在を支えているといっ
 い。たとえ金鶴泳のような作家では、父親の暴力とは、人間の〈内面〉と根源的に対立してしま
 ような、不条理な〈外部世界〉の象徴として記憶の底から浮かんてくる。李恢成ではそうではない。
 彼の父親像には、いわばからみあつた愛憎の錯綜を、ひとつひとつ解きほぐして掌上に乗せてみると
 いった趣きがある。このとき金鶴泳の錯綜のままに封じられたような鋭い視線ではなく、宥和的な情
 感で溶かされた柔らかな視線が父の像を包むように現われる。

『人面の大岩』の中で、作家は、学校で柔道の練習に夢中になっている息子を迎えに、小雨の中を
 やって来た父親の像を描いている。息子はこのはじめでできごとが起こったかと思つてギ
 クリとするが、父親は「ほとんど自然な親の表情で」傘を主人公に手渡して雨の中を帰ってゆく。こ
 ういうところに、作家の柔軟な記憶の肉眼のようなものが感じられる。しかし作家はそういう記憶が
 ら、絶えず現在の生を意味づけるようななにかを引き出そうとするのである。

TAKEDA SEIJI, *Zainichi to iu konkyo* (1983), pp. 9-10

(TURN OVER)

3 Translate into **English** the following passage from a seen text: [30 marks]

私の見た処では、信州あたりの新平民を大凡二通りに分けることが出来ると思ふ。high class とでも言はうか、開化した方の新平民と、それから low class、開化しない方の新平民と、斯う二通りだ。開化した方の新平民は、容貌も性癖も言葉づかひなども凡ての事が殆んど吾々と変る所はないと思ふ。譬へば左様いふ階級の中には弥右衛門さんのやうな人があつたり、中学校長にもなり得る力を有つて居る人が出来たりする。開化しない方では、野蠻人でも下等の野蠻人は野性が顔に現はれて居るやうに、第一、容貌も何となく粗野で、吾儕の恥かしいと思ふことを別に恥かしいとも思はない風である。顔の骨格なども吾儕と違つて居るやうに見える。殊に著しいのは皮膚の色の違つて居る事だ。他の種族と結婚しない中には極端な同族結婚をするところからして、一種の皮膚病でも蔓延して居るのではなからうかと思はれる。左様云ふ手合は多く顔がむくんで、田虫などの出来て居るやうに見えるものが往々にある。顔は細長いよりは円味を帯びた方で、奥行の浅い、陰日和の薄い、一口に言へば単純な形のものが多いやうで、それに比べると一方の新平民は、矢張普通の日本人と同じやうに、頬の骨などが高く秀でて、発達した性格を深く刻みつけたかとも見える。よく私は小諸の穢多町を歩いて、無智零落の境涯に沈んで居る新平民の男女を目撃した。あるひは土間に躡なぞを敷いて半裸体で寝て居るやうな

question 3 continued...

貧しい憐れな家族をも見たが、恐らく彼様あなが今日の人間社会にある最下層生活の一つだらうと思ふ。

穢多には一種臭気があるといふことで、小諸の人達はひどく其を嫌つて居る。吾儕われらは特にそんな事を感じもしない。尤も家が不潔であるとか、多少皮革類をいぢるとか、靴とか三味線とか、それから馬——あの馬の斃なげれたのを売つたり買つたりして居るのだから、自然さういふことを言はれるのだと思ふ。小諸の与良町よらまちに山五やまごと云ふ塩物屋があつて、そこへ克よくく碁碁を打ちに来られる隠居さんが私に斯ういふことを話した、何でも収穫とと時分になると、新らしく出来た稲を一束ひとつかづゝ持つて、お出入の証しよしに置いて行く。それが新平民の習慣であつたさうだ。其隠居さんの話で見ると、敷居から中にははひると云ふ事もまあ嫌ふと云ふので、茶なぞを馳走しても穢多に飲ませる茶碗は別にしたと云ふ風ださうだ。穢多のことを四足しそくと云ふ事は前に言つた小山氏から聞いた話なので、今だに士族は士族、町人は町人、百姓は百姓と、階級差別の思想の脱ぬけない山国の人が、同格に新平民を見るといふ時機は遠い将来のことだらうと思ふ。

SHIMAZAKI TŌSON, 'Sangoku no shinheimin' [1909], *Shimazaki Tōson zenshū*, Vol. 10, p. 54

(TURN OVER

SECTION B [based on EAS.2]

4 Translate into **English** the following passage from an unseen text: [40 marks]

増大する中国への脅威感

政府の尖閣諸島購入を契機として激化した中国の反日暴動は、日本国民の中国に対する脅威感を一気に高めた。もともと、経済力の増大を背景とした急速な軍備拡張に対する懸念や、大國主義的な対外行動に対する不信感は年々拡大している。特に二〇一〇年の尖閣沖の漁船衝突問題を機に日本国民の中国に対する意識は、内閣府の「外交に関する世論調査」(平成二十三年十月実施)でも「親しみを感じない」人

の割合が七割を超えたといい高い比率を示していた。今回の反日暴動や尖閣諸島をめぐる中国政府の強硬な姿勢は、今夏の李明博韓国大統領の竹島上陸問題と併せて、日本国民の間に領土・領海問題への関心を否が応でも高めたこととは間違いない。

こうした領土・領海問題に直面している日本の安全保障体制は大丈夫なのであるか。いざとなったら日米安保体制の下、米軍に頼るといのが国民の大部分の期待なのかもしれない。日中間の対立が激化するなかで、たしか

に米国は「尖閣諸島は日米安保条約の適用範囲」と繰り返し明言している。しかし、一方で米国は「領土問題には中立」とも述べているので、尖閣諸島を日本が適切な管理下に置き、防衛努力も日本自身が担う姿勢を示さなければ、対中戦争となる可能性がある問題に軽々に関与してこないであろう。したがって、日本自身の防衛体制に不備がないのがまず問われなければならない。

高まる中国の「脅威」に対して日本の防衛体制はどうなっているのか、問題点があるとすれば何かを具体的に検討していきたい。

北方重視型から
南西方面重視型の配備へ

さて、軍事予算を年率一〇パーセントを超える割合で増大させて軍拡を行っている中国であるが、特に軍備の増強・近代化が進展しているのが海空戦力といわれている。詳細は省くが、空

question 4 continued...

軍ではステルス性能を有した新世代戦闘機の開発、海軍ではソブレンヌイ級ミサイル駆逐艦や原子力潜水艦などの配備、そして旧ソ連からの航空母艦（ワリャーク）の購入と配備など、それまでの沿岸海軍から大洋海軍へと急速に変貌している。中国が唱える「第一列島線」のみならず、「第二列島線」までを勢力下に置き、台湾問題などで軍事衝突した場合に米軍の接近を阻止しうる実力を着々と整えている。

SATŌ AKIHIRO, 'Nihon no bōei taisei wa ryōdo yūji ni kinō suru ka', *Chūō kōron*, November 2012, pp. 118-9.

尖閣諸島	Senkaku islands
漁船	fishing vessel
李明博	Lee Myung-bak
駆逐艦	destroyer
潜水艦	submarine

(TURN OVER)

5 Write a commentary in **English** on the following passage from an unseen text:
[30 marks]

共有しうる「三つの大国」のビジョン

二〇〇三年、日本と中国の友好と発展を促進することを目的として、両国政府の民間諮問機関「新日中友好二一世紀委員会」が発足した。同年五月の日中首脳会談での合意によって設けられた同委員会に、私は日本側座長として、二〇〇八年までの五年間にわたってかかわることとなった。

ビジネス上では中国との付き合いはあったものの、私自身は中国のエキスパートではなかったが、従来の両国の交流の幅を広げていきたいという考えもあったのだろう。委員の園田矢さん（NHK解説委員）や五百旗頭真さん（防衛大学校長、当時）、地球物理学者の松井孝典さん（東京大学教授）、作家の

石川好さん、経済学者の伊藤元重さん（東京大学教授）、宇宙飛行士の向井千秋さん、政治学者の国分良成さん（慶應大学教授）とともに、中国側委員と、大連で開催された第一回会合を皮切りに、五年間に八回の会合を重ね、率直な議論と交流を進めてきた。多くの提言を公表する一方、各地で公開のシンポジウムなども開催し、とりわけ青少年の交流にも成果があったことは喜ばしいことであった。

この体験を通じて私自身が得たものも決して小さくない。とりわけ、中国側座長をつとめられた鄭必堅座長との知遇を得たことは、私にとって非常に大きな出来事であった。

鄭必堅座長は、元中国共産党中央党校の常務副校長として、現指導部の胡錦濤国家主席をはじめ、多くの中国要人がその

question 5
continued...

薫陶を受けてきた人である。第一回の会合に先立って北京で開かれた、両国委員の顔合わせの際に初めてお会いしたが、大きな存在感と風格が印象に残らずにはいられない人であった。残念なことに私は中国語ができず、鄭さんは日本語ができな。しかし、それから五年間の議論と交流を通じて、鄭必堅座長への信頼は揺るぎないものとなった。該博な知識と深い教養、適切な判断力を兼ね備えた人である。

当時、小泉首相の靖国参拝のために、両国間の首脳クラスとの交流は途絶している状況であった。その後、安倍総理の訪中があり、「戦略的互惠関係」という、今にいたる両国関係のキーとなる概念が打ち出されるなど、関係改善への動きが出てきた。

それを受けて開催された第五回の会合の際、私たちは温家宝首相と面談することとなった。当初の予定時間を超える熱心な話の後、帰り際に私から、まさに「外交辞令」と言えるかもしれないが、今度はぜひ温家宝首相の訪日を期待している旨を申し上げた。通訳を介しての返事では「条件が整えば訪日する」とのことであった。「条件」とは何を指すのかと思いつながらの帰路、車中に中国政府外交部の日本課長から電話があり、「先ほどの温家宝総理の返事について、首相の思いを正確に日本語で言うならば、『すでに道はできたので、その流れにしたがって、よい時期を見計らって何うことにし

ます』と言ったのです」とのことであった。温首相が中国の故事をまじえて語られたこともあって、うまく伝えられなかったらしい。

KOBAYASHI YŌTARŌ, 'Ima kōryū o tozetsu sasete wa naranai', *Sekai*, November 2012, pp. 97-8.

諮問機関 advisory body; 五百旗頭真 Iokibe Makoto; 知愚 favour, friendship; 靖国 Yasukuni; 小泉 Koizumi; 安倍 Abe; 温家宝 Wen Jiabao.

(TURN OVER)

6 Translate into **English** the following passage from a seen text: [30 marks]

北方四島、竹島、尖閣諸島をめぐる日本外交が大きく揺れ動いている。七月三日、まず国後島訪問によって日本政府を揺さぶったのはロシアのメドベージェフ首相だ。続いて八月十日、韓国の李明博（イミョンボク）大統領が初めて竹島（韓国名・独島）を電撃訪問し、その五日後、尖閣諸島・魚釣島に香港の活動家たちが強行上陸した。ロシア、韓国、中国が連動して日本と対峙する構図。島国日本の国境伝いに連鎖爆破を引き

起こした原因、背景は何か。三正面作戦を強いられた日本外交は今後、どのような戦略展開が必要となるだろうか。

戦略なき李明博の「独島」上陸

領土をめぐる今回の連鎖反応の遠因は、二年前に遡る。メドベージェフ大統領の国後島訪問（二〇一〇年十一月一日）。それに強く反応したのは韓国だった。

韓国大統領の竹島上陸を決断させた

のには、メドベージェフ首相が大統領時代に続いて国後島を訪問した一件があったことは間違いない。

竹島はアワビ漁という産業次元の必要性に端を発して日本が領有、一九〇五年、正式に日本領として編入された。サンフランシスコ平和条約では、竹島の明記はなく、事実上、日本領と見なされたが、五二年、李承晩（イシグン）大統領が海洋主権を宣言、竹島を韓国領に組み込んだ（李承晩ライン）。二年后、韓国

question 6 continued...

は沿岸警備隊を竹島に派遣、実効支配に乗り出した。六五年の日韓国交正常化の際、日本側は国際司法裁判所（ICJ）提訴による決着を目指したが、実効支配する韓国は応じなかった。

米国は当時、敗戦後奇跡の復興を成し遂げた日本に対し、北朝鮮と対峙し、冷戦の最前線国家として重要な役割を担う韓国との現状維持を期待。日本は竹島の「不法占拠」を受け入れたまま、問題先送りを容認した。問題を曖昧にしたまま構築された日韓関係の法的・実態的枠組みの構図。これが、その後、日本との国力差を詰めてきた韓国につけ入る隙を与えたのだ。

竹島問題は韓国にとっては元々、純粹な領土問題ではなく、歴史問題として捉えられてきた。冷戦下、戦後処理で曖昧にされた「戦争責任」問題は侵略された側の外交的ツールとして使われる余地を残した。

再びそれが問われるきっかけは昨年八月三十日、韓国憲法裁判所が元慰安

婦の賠償請求権について下した判決だった。韓国政府が交渉努力をしないのは違憲だとしたものだ。韓国側が歴史問題として位置づけてきた従軍慰安婦問題について、日本側は「解決済み」の立場だったが、それが改めて懸案として浮上したことによって、親日と見られてきた李明博大統領は苦しい立場に追い込まれた。これに大統領自身も身内の事情も加わった。政権がレイムダック化する中、目先を変えるためにも飛びついたのが竹島上陸だった。

八月十日、李明博大統領は「戦略なき上陸」を敢行した。そこには、究極のポピュリズムがあるだけだ。

SUZUKI TOSHIKATSU, 'Sanshōmen sakusen o shiirareru Nihon, Chū-Ro no sekkin o habame', *Chūō Kōron*, October 2012, pp. 102-3.

(TURN OVER)

SECTION C [based on J.14]

7 Translate into **English** the following passage from an unseen text: [40 marks]:

石清水八幡がなんで有名かというと、これは平将門の乱の時に、時の帝が「無事に平定されますように」という願をこの社にかけられてな、それが無事かなえられたもんで、その後は大層大切にされてな、四月の賀茂神社の祭と並んで、八月の石清水八幡の祭は、京の都の二大祭になったという、そういうもんなのじゃ。

またな、この石清水八幡というのは、源氏が自分達の氏神じゃと考えてな、「南無八幡大菩薩」^{ぼんざう} ったら、侍が合戦に出る時の祈りの決まり文句みたいになった。源頼朝もこれを崇めてな、別に御室や大内の仁和寺と比較する訳でもないが、朝廷の傾いて行く鎌倉時代になっても、こちらはイヤサカに栄えとったのじゃ。

そういうところに仁和寺の坊主が行く訳だわな。七百年前の昔だぞ。京の都を突っ切って、一人でトボトボ歩いて行くんだわ——つつうのは当たり前でよ、その昔にはお前、「京の都ガイドブック」なんぞというもんはないんだぞ。たかが都を突っ切っただけで、なんにも分かんねエやつにはなんにも分かんねエという、そういう世界だわな。

石清水八幡というのは、別名男山八幡というんでも分かるように、これは、男山という山のテッペンに建つとる。そして、そのふもとに極楽寺、高良明神^{こうらみん}という、寺と神社が別に建つておる。まア言ってみれば、雛の節句の雛段のテッペンにはお内裏様が坐つとつて、その下の方に左大臣、右大臣が飾つてあるようなもんじゃな。お内裏様が石清水、左大臣・右大臣が極楽寺・高良明神というところじゃるか。誰もお前、左大臣・右大臣の人形見てよ、「ああ、お内裏様のお雛様だ」と思うバカもいめエがよ、仁和寺の坊主のやったことは、それだわな。

昭和が終わって昭和天皇のご大喪があつた時に、「政治と宗教の分離」なんてことを言われたわな。

question 7 continued...

男山の麓に来たら、寺があつて神社もある。「あー、これこそ石清水の八幡だな」と思つて、カンジンの石清水八幡を拜まんて帰つて来ちまつた。アホな坊主だ、「山までは見なくて」もねエもんだと思うわな。お前さんの時代ならばなんでもかんでもマニユアルのガイドブックがおありんさるから、まさか山の麓でUターンつうこともござんすまいがよ、昔はそんな便利なものはないから、こう、いうことになつたんじゃ。

しかしなア、お前さんらはガイドブックの類があるから、「ああ、石清水はこの上だな」で、さつさと上に登つてくだらうがよ、しかしそうなつたら、この仁和寺の坊主のように、麓の寺や神社に参るつてことはせんじやろが、あんな？ 「なんだこれ、関係ねエじゃん、行こうぜ行こうぜ」つてな。ガイドブックにや、本地垂迹もヘツタクレも書いてなからうからよ、下手すりや、寺と神社の区別もつかないようになつちまうがな。

HASHIMOTO OSAMU, *Ehon tsurezuregusa* (2005), vol. 1, pp. 222-225.

石清水八幡宮 Iwashimizu Hachimangū; 氏神 tutelary deity; 平将門 Taira no Masakado; 御室 Omuro; 大内の仁和寺 Ninnaji; 極楽寺 Gokugakuji; 雛の節句; dolls festival; テッペン summit; 麓 foot of mountain; 加茂神社 Kamo jinja; 源頼朝 Minamoto no Yoritomo; 崇める to revere/to respect; 突つ切る cross; とぼとぼ歩く plod; 内裏様 Emperor and Empress dolls; 宇佐 Usa; カンジン main focus; 本地垂迹 Honji Suijaku, ie the theory that Shinto deities are forms of Buddhist deities.

(TURN OVER)

8 Write a commentary in **English** on the following passage from an unseen text:
[30 marks]

第一段

春はるって曙あけぼのよ！

だんだん白しろくなつてく山やまの上うへの空そらが少すくし明あるくなつて、紫むらさっぽい雲くもが細こくなびいてんの！

夏なつは夜よよね。

月つきの頃ころはモチロン！

闇やみ夜よもねエ……。

蛍ほたるが一杯いっぱい飛びかつてるの。

あと、ホントに一つか二つなんか、ほんやりポーツと光あかりつてくのも素敵すてき。雨あめなんか降ふるの

も素敵すてきね。

秋あきは夕暮ゆふぐね。

夕日ゆふひがさして、山やまの端はたにすごく近ちかくなつたときにき、鳥とりが寝ねるところに帰かえるんで、三さんつ四しつ、

二につ三さんつなんか、飛び急いそいでくのさえいいよ。ま・し・て・よね。雁かりなんかのつながつたの

がすつごく小さく見えるのは、すつごく素敵すてき！ 日ひが沈しずみきつちやつて、風かぜの音ねや虫むしの声こゑなん

か、もう……たまんないわねッ！

冬ふゆは早朝はやあさよ。雪ゆきが降ふつたのなんか、たまんないわ！

霜しもがすんごく白いのも。

あと、そうじゃなくても、すつごく寒ひやいで火かなんか急いそいで

でおこして、炭すすの火か持もつて歩いてくのも、すつごく「らし

い」の。昼ひるになつてき、あつたかくダレてけばき、火鉢かまどの火か

だつて白い灰かばっかりになつて、ダサイのッ！

question 8 continued...

第五段

昔、ある女が、男もするという日記を女（である私）もしてみんとてするなり。ところが日記というものは、日々に起こったことを書きつけるものであるのに、その女は日常のことなどには興味がわかないので、自分の感性に心地よいことだけを書きつらねたそうだ（たとえばこうである）。

「春はやつぱり早朝がいいと思うのよね。だんだんに黒い山の輪郭線がくつきりしてきて、むこうの空がほの明るくなってきた、紫色に立ってばかりいる雲がすこし、柵を引いたりするのって最高」

「夏は夜よ。それもウィーンの社交界のパーティーに出席したりするのが一番ゴージャスだと思う。実は私もそこに招待されて出席したんだけどもう、うっとりしちゃった。その日のためにダンスもすごく熱心に習ったのよ」

ところがその日記（もどき）が人の目に触れることになり、いいわあ、この人の感度最高じゃん、という評判が立ってたちまち女は人気者になってしまったそうである。

そんな彼女の詠んだ歌（にこういうものがある）。

この味がいいねと君が言ったけど

六月十日は時の記念日よ

〔この味がいいねと彼が言ったんだけど、その日は六月十日だったからそれが時の記念日であるということは動かしがたい事実なのよね〕

これらを見るにつけても、やつぱり今は女性の時代であり、そのことを正しく理解してしないと自民党もどえらいめにあうことだなあ。

9 Translate into **English** the following passage from a seen text: [30 marks]

この作品集に収録されている作品群には、統一性がなく、バラバラだと言う人がいるかもしれない。ものよつては一応小説になつてはいるものもあるが、一方にはほとんどエッセイのような内容のものも混じつてゐる。そして、テーマも不統一である、と。

ところが、案外そうでもないのである。やや強引に私はそう言うわけである。

まず、小説かエッセイかという点に関しては、私はここに納めた作品を書く時に、そのどちらでもなく、どちらでもあるようなものを書こうと意識していた。小説とエッセイの中間のところで、嘘かと思えば真実で、真実かと思えば必ずしもそうではないような、とにかく他の小説群よりは私の考え方が前面に出ているものを書いてみたのである。そういう意味で、多少の共通項がある。

そして、テーマであるが、意外にもこれがバラバラではないのだ。

まず、後半の三編を除いて、なんとなく翻訳というところを取りあげてゐるのはわかつてもらえるであろう。古文を現代語訳するのも、お経の意味を考えるのも、英語の翻訳の面白さをからかうのも、その意味では同一のテーマと言える。『日本の猫である』のどこが翻訳テーマなんだと叱られそうだが、あそこで私は、猫の思考を人間のそれに翻訳するという作業をしている（とも言える）のである。

翻訳とは、異つた言語の出会いの場である。それぞれの言語のバックには、それぞれの文化があるのであり、そういう異文化があそこで触れあつてゐるのである。そこには、不如意なコミュニケーションという、深く考えると大変な問題だが、軽く考えると大いに面白いギャップがあると私は思う。それでついつい、その辺をおかしく語りたくなつてしまふのだ。

二つの世界が出会つた時の、関係のぎくしゃくに私は興味があるのだと言つてもよいだろう。

そこで、後半三編のような、旅の記録もここに混ぜられることになる。私にとつて旅の楽しさとは、異世界と触れ、その地と自分との間になんとか折り合いをつけようとする楽しさなのである。日本国内であろうが、海外であろうがそれは同じことだ。

つまりまあ、二つの異なる世界の間でのコミュニケーション・ギャップを面白がることなら、ここに納められた作品群は生まれたのである。それは、言葉つて面白いものだなあ、という私の思い入れとどこかでつながつてゐると思われ。

SHIMIZU YOSHINORI, *Ese monogatari* (1991), pp. 246-7.

END OF PAPER